的自同性、人間のヒュブリス、根源悪、「存在−神−論」。そこからのエクソダス、脱自あるいは脱在、物語り、他者との出会いによって変容していく「わたし」のあり方を考え続けたい。

3　土井敏邦『〝記憶〟と生きる――元「慰安婦」姜徳景の生涯』大月書店、二〇一五年

たった一人のかけがえのない個人である姜徳景さんの顔が、まなざしが、わたしを見つめる。著者が言うように、被害者たちは顔の見えない〝マス（集団）〟で描かれがちだ。彼女の「思い」や「痛み」を想像しながら、記憶に刻みたい。

4　島すなみ詩集『ホーム・スイート・ホーム』編集工房ノア、二〇一五年

福島に残された牛たちの「目、目、目」、休戦時の非軍事地域に生息する無数の動物や生い茂る草木、大島青松園で踏みつけそうになった「カマキリ」、語られることのなかった「解剖台」。「アウェー・フロム・ホーム」で「発話体」としてつながることができるかどうかが、個人に帰ることへの可能性へと通じている。

5　関口裕昭『翼ある夜　ツェランとキーファー』みすず書房、二〇一五年

ツェランの詩をテーマとしたキーファーの作品を見たことはあったが、ここまで刺激的な物語が展開するとは想像しなかった。バッハマン、ハイネ、オースターといった作家との関わりだけでなく音楽や美術を織り糸に、ドイツ語圏を中心として二〇世紀後半の時空間を旅するような味わいで、とても勉強になった。

川端康雄（イギリス文学）

1　奥田愛基、倉持麟太郎、福山哲郎『２０１５年安保　国会の内と外で――民主主義をやり直す』岩波書店、二〇一五年

2　山崎雅弘『戦前回帰――「大日本病」の再発』学研マーケティング、二〇一五年

3　Charles Ferrall and Dougal Mcneill, *Writing the 1926 General Strike: Literature, Culture, Politics*, Cambridge: Cambridge University Press, 2015

4　アントニー・ビーヴァー『スペイン内戦1936–1939』全二巻、根岸隆夫訳、みすず書房、二〇一一年

5　高橋健太郎『スタジオの音が聴こえる――名盤を生んだスタジオ、コンソール＆エンジニア』DU BOOKS、二〇一五年

1　ジョージ・オーウェルは一九四六年のエッセイ「政治と言語」のなかで、「現在の政治的混沌が言語の堕落と結びついていることを、また言語のほうから手をつければなんらかの改善をたぶん達成できることを認識しなければならない」と書いた。戦後七十年の二〇一五年はとりわけ政権与党議員やその追随者たちの言語の堕落の極み、反知性と反モラルの惨状を見る日々だったが、その一方で、この国で近年ほとんど聞いたことがないような高潔な政治言語が国会の内外で発せられる稀有な場にも立ち会うことができた。その主だった言葉が本書に採録されている。

2　「ナショナリズム」の定義はやっかいだが、オーウェルは一九四五年のエッセイ「ナショナリズム覚書」のなかでこれを「愛国心」（patriotism）と対照的にとらえている。彼のいう「愛国心」とは「特定の場所と特定の生活様式に対する献身」のことで、自分ではそれが世界一よいと信じているが他人にそれを押しつけたいとまでは思わない。だから「愛国心」とは「軍事的にも文化的にも本来防御的」なものだ。それに対して「ナショナリズム」は権力欲と不可分なもので、「すべてのナショナリストの不断の目標は、さらなる権力、さらなる威信を獲得すること、といってもそれは自己のためではなく、彼がそこに自己の個性を没入させることを選んだ国家なり何なりの単位のために獲得すること」である。その意味でのナショナリズムとして近代日本に惨禍をもたらした最悪の形態が、本書で分析されている「大日本病」ということになるのだろう。「国体思想」というウィルスによるこの病が蔓延した戦前の「亡国の国家体制」への回帰を図ることがいかに「愛国」とは正反対の行為であるか。その回帰にむけての制度変更の動きがいかに危ういものであるか。危機の感覚を研ぎ澄ませる一助となる一冊。

3　いまから九十年前、一九二六年五月のイギリスのゼネストは二八〇万人の労働者が参加し、TUC（労働組合会議）側の敗北に終わるものの、労働運動史のなかで特筆されるストライキとなった。それは当時の作家たちにもインパクトを与え、ヴァージニア・ウルフの『灯台へ』（一九二七年）やD・H・ロレンスの『チャタレー夫人の恋人』（一九二八年）をはじめ、多くの作品にその反応が示されている。本書は「一九二六年ゼネストの英文学史」と呼べるようなユニークな研究書。この「英文学史」ではウェールズの作家たちが重要な位置を占めている。

4　ソ連崩壊後に入手可能となった新資料を駆使して書かれたスペイン内戦の通史。二〇一六年は内戦から八十年の節目に当たる。この機会にオーウェルの『カタロニア讃歌』（一九三八年）の再読にあたり（とくに『動物農場』創作の契機となった共和国内部での権力闘争の詳細について）参照するのに有益な本。

5　一九七〇年代のレコードの多くは音が素晴らしくよいのだが、それはなぜか――レコーディング・エンジニアである著者がその問いを探求した本。本書によれば一九七二年が二十世紀のレコーディング文化のピークであったが、その年は技術面では（マルチトラック化などの点で）未だ発展途上にあった。だがむしろ移行期の渦中であったからこそ「特別なバランスがスタジオ内では実現されていたのかもしれない」と著者は推測する。技術史的な移行期に最高の出来栄えがもたらされるという逆説は示唆的だ。一九七二年の名録音アルバム十枚がリストアップされていて、その一枚にニール・ヤングの『ハーヴェスト』が挙げられているのを見て我が意を得た思いがした。『アフター・ザ・ゴールド・ラッシュ』と並んで当時毎日のように聴いていたアルバムで、ジャケットを見ただけで生ギターの乾いた音と鼻にかかった甲高い歌声が脳裏に響いてくる。確かにいい音だった。

斎藤成也（人類学）

1　瀬川拓郎『アイヌ学入門』講談社現代新書、二〇一五年

2　大野秀敏・佐藤和貴子・齊藤せつな『〈小さい〉交通が都市を変える――マルチ・モビリティ・シティをめざして』NTT出版、二〇一五年

3　中村修也『天智朝と東アジア』NHKブックス、二〇一五年

4　百々幸雄『アイヌと縄文人の骨学的研究』、東北大学出版会、二〇一五年

5　三元社編集部編『竹村民郎著作集完結記念論集』三元社、二〇一五年

1　考古学者が広い視野から展望した新しいアイヌ研究。特に、平泉寺金色堂に日高地方産の金が使われているという可能性がとてもおもしろい。古代歴史文化賞を受賞。

2　新国立競技場についても槇文彦氏らとともに論陣を張った建築と都市計画の専門家が、若い弟子二人の協力を得て新しい都市交通のすがたを世に問う。電動アシスト自転車で通勤している評者は、本書の視点に親和性を感じる。そもそも都市内交通は平均移動速度をもっとずっと遅くすべきなのだ。

3　高校生時代から、評者は白村江の敗戦のあとの日本の歴史が平穏すぎると感じていた。本書はこの疑問に日本史家がようやく答えてくれた快著。当時の唐とアジア太平洋戦争後のGHQが類似していたという視点は慧眼であろう。中国の正史にはこの時代の日本についてどう記述されているのかが、気になるところ。

4　形質人類学の碩学による、四十年にわたる研究の集大成。評者らの遺伝子研究も批判的にではあるが引用されており、ありがた

い。東北集団の成立については、百々説と評者が『日本列島人の歴史』（岩波ジュニア新書、二〇一五）で提唱した三段階渡来説はウマがあうような気がする。

5　全五巻の著作集の内容に関するコメントを中心に、五十名が寄稿した。竹村先生が共同研究会のいくつかに参加されていた国際日本文化研究センター関係者が多い。評者も「安岡正篤の評価をめぐって」を寄せた。竹村先生による末尾の「ジュンブライドがやって来た」が泣かせる。

竹内　洋（社会学）

1　モイセス・ナイム『権力の終焉』加藤万里子訳、日経BP社、二〇一五

権力が集中した専制国家は、政治的社会的安定と経済的活力に資することはない。しかし、権力の衰退と分散もある閾値を超えると、逆に安定と活力の阻害要因になる。本書は、いまの世界は権力の最適値を越えて、無秩序と混乱をもたらすゾーンに入っているとする。権力の作動を妨害する対抗的ミクロパワーは充満しても、行動方針を決め、実行する力がおとろえ、「重心のない社会」となるからだ。G0ともいわれる昨今を考えるための力作。

2　木村洋『文学熱の時代――慷慨から煩悶へ』名古屋大学出版会、二〇一五

一八八〇年代後半を境に知的青年の志向が政治熱から文学熱へ変化したことはよく知られているところだが、本書の独自性はその変化を保守派論客・教育家・統治権力の旧思想と文学的知識人の新思想との対抗関係のなかで跡づけ、動きのある文学史となっているところ。

3　門井慶喜『東京帝大叡古教授』小学館、二〇一五

日露戦争後の世情騒然とした時代を舞台にして、第五高等学校生と表題になっている東京帝大法科大学教授を主人公にした歴史ミステリー。最後にこの青年が実在の歴史上の人物と「種明かし」される。そう言えば、作中にいくつか伏線がはってあった、と読後に驚く。

4　野口雅弘『官僚制批判の論理と心理――デモクラシーの友と敵』中公新書、二〇一一

官僚（制）バッシングは新自由主義の後押しをえてボルテージが高まっている。また官僚制と戦うカリスマ的リーダーへの期待も増している。しかし、それは正しい方向なのか。デモクラシーの条件としての官僚制を考える。刊行直後に読む機会を逸して昨年読んだが、ウェーバーの官僚制の今日的読み方が示唆的。

5　カール・レーヴィット（西尾幹二・瀧内槇男訳）『ヤーコプ・ブルクハルト　歴史の中の人間』ちくま学芸文庫

ブルクハルトの『世界史的考察』は学生時代に読んだ。もう一度ブルクハルトの著作を読もうと目録を探していて、まずはこの本にした。ブルクハルトとニーチェの交流から浮き上がる両者の「生に対する歴史」の「利益」（ブルクハルト）と「弊害」（ニーチェ）の指摘からはじまる。ブルクハルトの著作にむかう前に読むのに恰好な入門書。

田崎晴明（数理物理学）

1　岸政彦『断片的なものの社会学』（朝日出版社）

2　おかざき真里『阿・吽 1～3巻』（小学館）

ぼくにとって九〇年代初頭のインターネットは「掲示板の時代」だった。個性の強い主催者がそれぞれのスタイルの掲示板を運営し常連の論客が適度に開いた環境で多彩な議論を交わした。ぼく自身も東北大数学科の黒木玄さんの掲示板に出入りし多くを学び多くを語った。今も親交のある評論家・翻訳家（が副業）の山形浩生さんや文筆家・翻訳家のニキリンコさんと出会ったのもこの掲示板だ。

その頃よく見ていた掲示板の一つに面白い奴がいた。社会学の大学院生。短い（多くの場合くだらない）投稿が強い印象を与える。興味をもって彼の個人ページの文章を読んだ。内容はほとんど覚えていないが圧倒的な筆力から受けた驚きは忘れない。こんなすごい文章を書く奴がいるんだ。でも、これを読むのは一部の掲示板の常連だけだろう。天才的な文才の無駄使い……

1は社会学者の岸政彦が聞き取りの現場で出会った断片的な物語を綴った書、「面白い奴」の近著だ。空き時間を紡ぐようにして一気に読んだ。「すぐ目の前に来たときに気付いたのだが、その老人は全裸だった。手に小さな風呂桶を持っていた。」うん。確かに彼の文章だ。小説のなかの本筋とは関係ないが書き込まれていて心に残る挿話だけを読むような快感。「解釈はしない」と宣言しながらも時には普遍化に流れる岸さんを見るのも一興だ。そしてなにより本書が話題の書となり彼の文章が広く読まれていることが素直にうれしい。

2は人気漫画家おかざき真里の連載中の作品。最澄と空海の物語である。未完の作品について語るのはフライングだろうが、漫画でこそ可能な表現で重厚な物語が綴られていく様は圧巻。絵も漫画というレベルを超えて美しく力強い。漫画から離れた大人にも自信を持って薦められる作品だ。

二〇一六年の今、ぼくにとって多くの人とネットで交流する場はツイッターに移っている。ツイッターでのぼくのアイコンは、なんと縁あって真里さんが描いてくれたぼくの似顔絵だ。巨大で流動的な人々の結びつきの中に一四〇字以内の短い投稿が次々と放流されていく環境には未だ馴染みきれないが、この混沌からどんな文化や出会いが生まれるか楽しみでもある。

早川尚男（物理学）

1　須田桃子『捏造の科学者　STAP細胞事件』文藝春秋、二〇一五年

二〇一四年年明けに華々しく登場したSTAP細胞は主にインターネットの匿名ユーザーの調査によって捏造疑惑が直ちに持ち上がり、程なく不正認定された。しかしこの事件は当事者の小保方氏の反論や笹井氏の自殺、小保方氏の学位取り消し等の劇的な展開があり、史上稀に見る科学スキャンダルとなった。本書は、電子メール記録の詳細迄含んだ報道する側からの本事件の克明な記録である。特にSTAP細胞の捏造が如何になされたというより、その事件に関わった人間の息遣いを感じられるのが本書の特徴となっており、忘れてはならない一冊になった。

2　佐藤文隆編『林忠四郎の全仕事』京都大学出版会、二〇一四年

林忠四郎は天体現象に原子核物理を応用したパイオニアの一人であり、元素合成の理論や恒星進化の林フェーズ、惑星形成の京都モデルの提唱等で知られている巨人である。この本は八一六頁に及ぶ大著であり、文字通り日本語での林の全仕事の紹介を行い、林の業績の概要を浮かび上がらせている。更に興味深いのは、幾多の俊英を林門下から輩出したのにも拘わらず、研究室運営で苦労してきたことを包み隠さず書いた事は貴重な記録となっている。林は五年前に他界したが、同級生であった南部も昨年他界した。物理学の発展期の巨人達がこの世を去り、現代の物理は高度に専門分化が進み、小粒感が否めなくなった。

3　エドワード・フレンケル『数学の大統一に挑む』青木薫訳、文藝春秋、二〇一五年

前項のように科学の専門分化が進んでいる印象がある中で、敢然と反旗を翻し、数学の広範な分野を代数群の表現論や保形関数論に結び付けて統一的に扱おうというラングランズ・プログラムを強力に推進している一群の研究者がいる。その中でも中心的役割を果たして、素粒子物理学者の第一人者と見做されているWittenとも共同研究を進めている著者が、当プログラムを一般書として語っている。数学理論の詳細を理解するのは却って分かりにくくなっているきらいもあるが、彼が育ったソ連で受けて来たユダヤ人に対する差別やアメリカでの成功、当プログラムへの参